

綜 報 Reviews

瑞浪層群の研究史

その1 明治以前の記録

糸魚川淳二*・渡辺俊典**

Historical review of records on the Mizunami fossils, Gifu, Japan

Part 1. Pre-Meiji period

Junji ITOGAWA* and Shunsuke WATANABE**

(Abstract)

Records on Miocene fossils in Mizunami area in pre-Meiji period are synthesized and reviewed. The oldest record is a mold specimen of *Vicaryella* replaced by calcedony found in Hakusan-shrine old mound (early Jomon period) of Tajimi City near Mizunami. Cast specimens of *Vicarya*, *Vicaryella* and other gastopods replaced by calcedony and sediments are called "Osagari". White one is "Tsuki-no-osagari" (excrement of the moon) and reddish one is "Hi-no-osagari" (excrement of the sun). There are many folk stories and the history of a temple on the origin of Osagari which has being deified by people in Tsuki-no-miya (shrine of the moon) and Hi-no-miya (shrine of the sun), and in the shelves for Shinto tablet in each home.

Fossils appear in Japanese poems (Tanka and Haiku) from Heian period (go up nine century) made by various poets who passed the area. They are recorded in old literatures and monuments of poem.

Other records are also in various books as follows;

a. Books of Honzo (oriental "natural history")

Butsurui-hinsitsu 6 vols. (1763 A. D.) by Gennai HIRAGA

Unkon-shi 18 vols. (1772-1779) by Sekitei KIUCHI

Honzo-komoku-keimo 48 vols. (1803) by Ranzan ONO

b. Books on a topographical sketch and travels

Funpon-ko (1786) by Masumi SUGAÉ

Noshu-junko-ki (1739-1800) by Koko HIGUCHI

and others

Some of them are shown in plates.

* 名古屋大学理学部地球科学教室・瑞浪市化石博物館嘱託 Department of Earth Sciences, Nagoya University, Nagoya

** 瑞浪市教育委員会 Board of Education, Mizunami City

1976年10月10日 受理

1. ま え が き

その豊富な内容と多量の産出によって、瑞浪地方の化石は有名であり、また、各種の資源はこの地方の人々にとって切っても切れない大切なものとなっている。この地方において、化石は時に信仰の対象となり、歌や俳句にも歌われた。江戸時代の本草書の中にもしばしば登場してくる。化石や地層の科学的な研究は、明治時代になってから始まるのであるが、それ以前の時代にまでさかのぼって、我々日本人の祖先が、自然をどのように感じ、どのようにとらえていたかをさぐって見るのも意義あることと思われる。

筆者の一人糸魚川は、「瑞浪の地層と化石」——瑞浪市化石博物館研究報告第1号（開館記念号）に研究史をかんたんにまとめた。渡辺は「瑞浪市史」の編纂にあたった際、多くの資料・古文獻にあたり、さまざまな事象と化石の関係についてふれた。その後、瑞浪市化石博物館の開館にともない、化石に対する関心がまし、この分野についての資料もいくつか収集された。明治以前を一つの区切りとして、民話・縁起から本草書にいたるまで、各種の資料に見られる、化石や地層とその時代の人々との関連を改めてまとめて見たのが本稿である。

本稿を草するにあたり、瑞浪高等学校の西本博行氏、多治見考古学研究会の田口昭二氏（多治見市小泉小学校）、瑞浪市日吉町慈照寺住職石神快応氏から多くのご教示を頂いた。日吉町宿 鈴木秋声氏、瑞浪市化石博物館前館長渡辺卓郎氏は資料を提供され、株式会社未来社は出版資料の引用を許された。以上の方々に心から感謝の意を表したい。

2. 古墳から出土の化石

岐阜県多治見市白山町3丁目に白山神社遺跡がある。多治見考古学研究会により、1968年に発掘された際、*Vicaryella* sp. と思われる、玉髄で置換された巻貝の化石が産出した。この地方で、人間が化石と関係したもっとも古い記録と思われる。世界的には、ネアンデルタール人が化石を採集し、クロマニヨン人が、化石を装飾品として使用した記録があるが、これは、日本で最初の例といえるかもしれない。

遺跡からは諸磯B式の羽状縄文、半載竹環文などの土器片、石匙、石鏃、石錐、打製石斧などが共産し、時代は縄文時代前期の可能性が高い。

瑞浪地方で「おさがり」と呼ばれる玉髄（ SiO_2 ）で置換された化石は、固く、かつ美麗で、装飾品あるいは石鏃として使用しうる材質をもっている。白山神社遺跡での発見は、この地方の遺跡において、今後発見される可能性を示唆しているものといえよう。

3. 民話と縁起

「月・日のおさがり」についての瑞浪の民話を紹介する。

むかしむかし、ずっと遠いそのむかし、まだ天地がよく固まっていなかったころのことです。

お日様はくる日もくる日も東から出て西に沈む旅を続けて見えました。連日の旅にフト疲れを覚えられたお日様は、或る日いまの日吉の里の大木に下りてひと休みなさいました。

疲れを休められたお日様は、やがて再び西への旅に立たれましたが、その前に用を済まされました。この時のお日様の落としものはやがて美しい無数の赤色の化石になりました。

ついでお月様もお日様同様、東から出て西に沈む旅を続けて見えました。この旅に疲れ

を覚えられたお月様もお日様同様ひと休みなさいましたが、その場所は日吉の里の西隣りの月吉の里の大木でした。この時のお月様の落しものもやがて美しい無数の白色の化石になりました。

ずつとあとになって、日吉の里に住みついた里人たちはこのお日様の美しい落しものを「日のおさがり」、月吉の里に住みついた里人たちはこのお月様の美しい落しものを「月のおさがり」、と呼んで本当に大切にしましたとき。

今でもこの地方で「おさがり」と呼ばれているのは、前にのべた、玉髓で置換された腹足類(巻貝)の化石で、その螺旋形の内型である。この地方の代表化石である *Vicarya yokoyamai* TAKEYAMA, *Vicaryella ishiana* (YOKOYAMA) をはじめ、*Batillaria*, *Cerithidea* などの Potamidae, *Chicoreus tiganouranus* (NOMURA), *Phos tsukiyoshianus* ITOIGAWA, *Siphonalia minuta* ITOIGAWA などで、主に月吉層から産する。とくに *Vicarya*, *Vicaryella* のものは珍重され、大きいもの、巻数の多さが尊重されている。白色で、主に SiO_2 からなるものは「月のおさがり」、不純物をまじえて、赤褐～暗褐色を呈するものが「日のおさがり」と呼ばれている。二枚貝類の *Cyclina*, *Hiatula* など、時にその内型が、 SiO_2 あるいは泥、砂などで置換されて残ることがあるが、「おさがり」とは呼ばない。あくまでその形が重要な要素となっていると思われる。

「おさがり」は民話からもうかがわれるようにこの地方の伝説に登場するものであり、同時に信仰の対象である。すなわち、「月のおさがり」は瑞浪市明世町月吉にある「月の宮」の、「日のおさがり」は日吉町社別当にある「日の宮」の御神体である。月吉、日吉の地名もこの神社に由来するものと推定される。

御神体と同様なものが、自分たちの住む村の、土地から得られるのであるから、当然のこととして、「おさがり」は、それぞれの家においても祭られた。多くの家々の神棚には、真綿(この地方でもかつては養蚕が盛んであった)にくるまれたり、小箱におさめられたりして、大切に保存されていたのである。日清、日露の戦役以降、「おさがり」を「弾丸よけのお守り」として、出征兵士が携帯する風習が生れ、まさに民衆と化石が密接な関係にあったことをうかがわせる。

「日の宮」、「月の宮」の起源については、それを確定する十分な古文献はない。しかし、各種資料を総合すると、中世あるいはそれ以前にさかのぼると推定される。後述するように、平安時代の古歌にも多くうたわれている。

「日の宮」は日吉町宿洞社別当にあり、日之宮神社あるいは天津日神社と呼ぶ。日霊社として美濃御坂越記(1772—1780)に記載されている。現存する最古棟札は元禄11年(1698)再建のものである。棟札の多くに日吉総代庄屋以下の名前があることから、小社であるが産土神にとどまらず、広く日吉郷中によって祭られたものであろう。

日之宮神社に関連して、その神宮寺と伝えられるものに日吉町宿洞の恵日山慈照寺がある。初期の詳細は不明であるが、寛文4年(1667)に日吉町平岩にある開元院の系下として再創されたとの記録がある。宝永7年(1710)の「日の玉縁起」(日吉町宿 鈴木秋声氏蔵)を伝える。日の宮神社と慈照寺の関連を示すものとして、また、御神体としての化石を指示するものとして興味深いので、以下に収録する。

日の玉縁起

三野国津田の庄青葉の里、日吉日天宮の由来を委しく尋ねるに、天地開闢の昔より地氣中央に集り、東国より西国迄晴ざる夏年久く、然るに人皇七代孝靈天皇五年に當って、三野国中央石の際より靄氣東西へ晴渡りて□□□ぬ、其時近州の水海・駿州の富士一時に見えそめけると

ぞ、其時分此所の山々の麓、みな海にして美形の魚類・貝類多く日神・月神の食物なりと言伝う、年移り時去って陸地となり、諸木生じて若葉を榮へける深山幽谷の合間なりといえども、月吉日吉里をならべて陰陽和合の正中なれば、草木五穀豊熟にして、昔より一年も天災を請る事なし、爰に桓武天皇五代鎮守府將軍良將の嫡子相馬の小次郎將門別腹の弟に定丸といえる人有り、天慶貳年の冬の頃將門謀叛事顕れて、同三年の春將門始め家門郎党ことごとく討死におよびけるが、定丸一人幼少なれば家人にいざなわれ、信濃の国の山奥に隠れたまひけるが、共に冥途の道連と覚悟を極め被成しが、心中に深く慮りて今爰にて消果なば、一門郎等の菩提誰有って弔むやと無念の涙にくれながら、ある道場に入って御弟子と成り、法体して諸国行脚を志し給ひ、日夜の修業おこたらずして、愚怠なる者には法を説き、うへたる者には米錢をあたへ給う故、世の人其慈しみを感じ慈照禪師とぞ号したる、禪師常々思いたるハ我日の本の日の本を尋ねんと、此里の榎の宿に來りたまひ、里人に問わせけるが年暦久しき事にして、あえて知る人無ければ、三七日が間、毎朝榎の木の本に出給ひ、読経し陽光を拝し給うに、ある日未だ日の出前なるに、丑寅の方に當って大杉の尾迄に日光輝く処有り、尋寄て是を見るに一つの名玉を得たり、其形十式曲りにして靈形の貝石なり、西ニ當って陰光残りどまる谷あり、同じく同様の名玉也、初の名を日の玉と号す。貝類は神代の食物なれば、日の御下りとも、日の糞とも唱えて慈照禪師一寺を築きて、日の玉を安置して一社を造立して日の宮を祭り、勅免有って榎の木山慈照寺と号しける、然るにしてより此かた靈驗日々あらたかにして、折ふし不思議の奇瑞度々なるにより、近国近辺は不申及、往來の貴賤歩みを運ぶ事とハなりき、中央大極の地なれば陰陽順くわんの地にして四方五、六里の内ハ、たとへ干損水損の年たりといへども多分の甲乙なく成じようせずという事なし。是れ此神の奇瑞なり、依て陰不足陽不足の国所ハ深く信心の人々ハ寄附ありなりき、殊ニ蚕がいの違ふ事なく、親子不仲、夫婦不和合すべて陰陽つり合惡しき所より発する事、此宮寺に願をむすびて感應あらずといふ事なし、志有る人々ハいのりて諸願を懸け給へ、成就うたがい有るべからずと言

宝永七年庚寅春三月板行 榎木山慈照寺現住

嘉永二年乙酉秋九月再板 同 山同 寺現住

慈照寺には「おさがり」がおさめられていたが、10年程前の火災により焼失した。石神快応住職によれば、高さ約15cm、赤褐色で12の螺層をもったものである。*Vicarya yokoyamai* であろう。

さらに、慈照寺の「お札」(渡辺卓郎氏所蔵、現在瑞浪市化石博物館保管)は、江戸時代末か明治時代に刷られたものであるが、元版はさらにさかのぼるもので、貴重な資料である(第55図版第1図)。両側に「日本一社日天御下像」、「御鏡□日御玉□燈」、下に「濃州土岐郡日吉恵日山慈照寺」とある。中央はあきらかに、「おさがり」で、住職の説話とよく一致する。

「月の宮」の名は古歌に多く見られる。月の井の水、月の休み木などの伝説があり、現在は石祠である。記録として残るものはない。「日の宮」における慈照寺と同様、神宮寺として草創されたと伝えられるものに雲松山大応寺がある。大応寺創建由緒(参史 484)に「慶安四辛卯年正月五日、月吉に大応寺と申す寺号を聞き候」とあるので、不詳であるが前身の存在は明らかである。明暦3年(1657)現在地に再建再創され、現在にいたっている。

明世町月吉は *Vicarya*, *Vicaryella* などの産地で、この地に、その「おさがり」を祭った「月の宮」の存在することはうなずける。しかし、日吉町にはそれらが産しないので、いずれからかもたらされたものである。地理的位置、赤褐色であることなどから推定すると、瑞浪市のもう一つの *Vicarya* の産地、土岐町清水産の標本である可能性がある。なお、月吉産の標本には白色のことが多い。

4. 歌・句に見られる瑞浪の化石

瑞浪地方は古くから街道と関係の深い所で、日本武尊の東征の道「土岐川道」にはじまり、東山道・鎌倉街道、中仙道と人の往来の多い地域であった。街道を上下する貴人、文人たちは、時々、所々に、その地にちなんだ歌や句を残しているが、瑞浪地方についても同様で、多くの記録がある。そのうち、「おさがり」、月の宮、日の宮と関連して次のものがある。

美濃国月吉の里にて

榊葉に おけるかがみの 面影に

神代おほゆる 月の休み木

僧志日

(夫木和歌集・美濃御坂越記)

むこ舟の しずくうかがる玉笹の

世々経て澄める 月の井の水

よみ人知らず

(夫木和歌集・美濃御坂越記)

月吉月の宮にて

榊葉に かけしかがみの 面影と

神もみまさん 月の休む間

伝 西行法師

(月之宮歌碑)

日吉日の宮にて

萬代を とぎすみ神の 日のみ霊

ここより永世の あかり立つらん

よみ人知らず

(美濃御坂越記)

掘りあてし 月日の糞や 葉ほり

三州 木朶

(類題集・木曾名所図会)

この中で特に興味があるのは最後の俳句で、当時(江戸時代中～末期)には化石を採集する風習があり、それが本草の葉石として使われたことを示している。一般に、月の宮を歌ったものが多いことは、東山道が月吉近くを通過していた時代があることと一致する。

5. 古文献の資料

a. 本草書

明治以前の“博物学”は本草学で代表される。本草学は中国で生まれた自然物を薬用とするために研究する、現在の薬物学の一つである。

我国へは飛鳥時代に渡来し、江戸時代末まで日本的なものに変貌しながら栄えた。日本におけるその歴史の中で、画期的な意味をもつといわれるのが、貝原益軒による大和本草(宝永5年—1708)であり、この後、本草学は博物誌としての意義を持つといわれる(上野, 1948, 1973)。

瑞浪の化石が登場するのが平賀源内による物類品隲(宝暦13年—1763)全6巻である(第55図版, 第4-6図)。この書は独創的な博物誌であり、平賀源内自身による観察をまとめたもので、博物学史上高く評価されている。2巻に多くの鉱物類、化石類が登場するが、7丁～9丁に「石髓」がある(第2図版, 第5, 6図)。その終りに近く、美濃の国産の日の糞月の糞についてふれている。「おさがり」の成因を適確に記述して、源内の力量を示すものといえよう。

その他、物類品隋に記されている化石・岩石に関連あるものは、石炭、禹余糧（鳴石のこと）、化石（蛤蚌、螺、樟、杉、松など）がある。地名としては、美濃、伊勢神原貝石山、遠江、信濃水内郡、紀伊畑島、下野塩谷郡、肥後葦北郡などがあり、ほぼ全国にわたる。

石、化石の分野の本草学者として著名なのは木内石亭（1724—1808）である。江戸時代の半ば、物産学（内外の物産を集め、展覧会を開き、出品物のリストを作る仕事）が盛んになったが（物類品隋もその一つの例といえよう）、その中で、石を集める多くの好事家が出た。いわゆる弄石家である。石亭はその1人で、雲根志18巻（1772—1779）を表わした。ここには、鉱物・奇石・化石が記載されていて、博物学としての地学の先駆をなすものといえよう。雲根志は前・後・三篇全15巻からなり、10類にわけられている。この分類は石亭の興味の対象によるもので、化石は第1表に示すごとく、各類にわたっている。

石亭は近江国栗太郡山田（現在の滋賀県草津市上山田）の人で、隣国であったせいか、美濃国へしばしば採集におとずれていて、雲根志前篇巻3・巻4に、明和4年（1767年）3月に御嶽（嵩）の宿より南の山道へ三里余り入って、月吉村で採集を行った旨記している。また、可児石原村（現在可児町石原）の三宅某がしばしば記事中に登場し、同好の友がこの地方にあったことをうかがわせる。石亭の記載は多岐にわたり、化石についても全国各地を網羅し、多種多様である。この地方のものに関しても、軟体動物（貝石）、*Vicarya*（月珠）、哺乳類の歯・骨（竜首石）、石炭などをあげ、収集は密であるといえよう。

石亭とはほぼ同時に、大阪の人で、木村吉右衛門（兼葭堂）（1736—1802）がある。石亭の標本がほとんど散逸したのに反し、彼の蒐集品は稿本石譜2冊と共に残されている。望月（1948）によれば坪谷幸六により名前が考定されていて、月糞石（美濃産）〔*Vicarya* sp. の蛋白石内型〕が含まれているという。

小野蘭山（1729—1810）は江戸時代の博物学の中で重要な位置を占めているといわれる。日本の本草学は彼にいたって頂点に達し、その本草綱目啓蒙（享和3年—1803）48巻はその集大成である。同書中、石部は5・6巻にわたるが、その5巻の中に、蛤蚌・蝦・蟹などと共に月の糞、日の糞について記載がある。文章から察すると貝原益軒の物類品隋からの引用と推定される。その他、松石（松化石）、石炭、禹余糧、太一余糧（壺石、鈴石）、石蝦、石蟹などの記述があるが美濃の地名はない。

b. 地誌・旅行記

街道を往来した人達は歌や句を残したが、旅行記や地誌にはさらにくわしい記録がある。「美濃御坂越記」の名前はすでにのべたが、安永年間（1772—1780）に園原旧富によって書かれたこの書には、鎌倉街道に沿った各地のことが述べられている。本稿に関係あることでは、「日吉本郷」の頂で、月吉の月の宮、月の休み木・月の井・月のおさがりについて、「天道日霊の宮」として、駅の艮（北東のこと）にあり、日吉の名所で、日霊がここに降座されて祭っていると記されている。経目したいいくつかの他の例をあげる。

i. 粉本稿

菅江真澄（1759—1829）は江戸時代中～後期の紀行家で多くの日記・図絵・随筆・地誌などを残している。三河国渥美郡牟呂村公文（現在は豊橋市）に生れ、30才前から旅に出て、特に東北各地をまわり、最後は秋田市で一生を終えた。その記録はすぐれたもので現在でも高く評価されている。

その真澄の初期の旅の写生帳に「粉本稿」（第55図版、第2図）がある。天明2年（1782）5月頃旅に出て、主に美濃・木曽をまわったが、その時から天明6年（1786）頃までの写生帳で、いくつかの図があり、真澄のもっとも古い絵を含んでいる。寛政元年（1789）末頃改写し

第1表 雲根志記載の諸物

Table 1. Materials listed in Un-kon-shi

編・巻	名前	産地	備考
前編卷之二 採用類	滑石 鴛管石 (蚯蚓石) 蛇骨	美濃国加兒郡石村 美濃御嶽月吉村 美濃	可兒郡可兒町石原 瑞浪市明世町月吉 サンド・パイプ? <i>Crassostrea</i> ?
前編卷之三 変化類	芦根化石 諸物化石 貝石	美濃国可兒郡石原村 美濃国御嶽月吉村山中 美濃国岩室・御嶽	可兒郡可兒町石原 貝類・諸木・諸草 明和4年(1767年)3月採集 岩室はどこか不明 一志, 千種, 鮎河, 師崎, 綴喜層群産 のものについてふれてある。 他に師崎より産すると。 美濃加茂市近く? 美濃加茂市蜂屋 明和4年3月21日採集 明和4年3月採集行
前編卷之四 奇怪類	胡桃化石 楊樹枝化石 株移木化石 石榴実化石 月珠 竜首石	美濃国月吉山 美濃国大田川 美濃国八屋 濃州月吉村 月吉村 美濃国コセ村	竜骨・竜歯(哺乳類の歯・骨化石)か と記している
後編卷之一 光彩類	馬腦	美濃国月吉	実際には産しない?
後編卷之三 像形類	鉄炮玉石 蓮花石	美濃国加茂郡大田川 美濃国鬼窟	美濃加茂市; 礫岩 御嵩町—瑞浪市境の鬼岩; 花崗岩
三編卷之二 採用類	石炭	濃州御嶽月吉山	
三編卷之三 変化類	松割木化石 諸木実化石	美濃国加兒郡妙賀村 美濃国月吉村未申へ20町	月吉南西20町の小山; 化石ではない?

編綴したもので、現在は大館市立栗盛記念図書館に所蔵されている。

その中の第3丁裏の図が第55図版第3図である。その解説には次のように記されている(菅江真澄全集第9巻, 429頁 未来社刊による)。

みのの国, 月吉邑といふ処の山より, 月の玉とて, 七わた八わたのかかる貝石のやうなるものいつる。蚌かたふしなともまじりたり。此玉, 十二曲たるは稀なり。大小ありて世にことなるもの也。近となりの日吉村よりは日の玉といふものの色は紅なるが出たりとて, むらの名によふ。いま, びいとう壺に入り寺にをさむ。今はこ此玉いつることなし。

図は「おさがり」であり, びいとう壺(ガラス瓶)におさめられた姿は, 前述の慈照寺のお札の図とよく一致する。菅江真澄の綿密な観察と確かな記録による貴重な資料といえよう。

ii. その他

濃州徇行記 樋口好古(尾張藩士)が寛政年間(1789—1800)に, 尾張藩領の村々について, 濃陽志略(松平君川, 宝暦6年—1756)を参考にしてさらにくわしく記述したものである。

土岐郡日吉村の項に

「月吉里土岐細久手の南なり、此里より三日月形の白石出る」

土岐郡宿洞村 日吉村支村の項に

「慈照寺林 杉立、是は茶別当にあり、ここに日の御下りと云石あり、(後略)」

新撰美濃志 尾張藩士岡田文園が天保年間に、美濃国中の村々について述べたもので、古文獻・古書の引用が多い。

土岐郡月吉村の項に

「(前略) 石蚕ハ山野に産す、俗に月の糞といふ、本草正譌に濃州月吉郷に多く産す月の球と云ハ石蚕なり、其刃石蛤も有之と記し、物類品隋の石髓の条に、美濃国に産する日糞、月糞と称するもの人甚珍とす、或日空中より此物を雨すと此説非なり、是亦乳水・玉液等の螺殻中に入り凝結して後螺殻去て乳液の残るもの也と見えたり、又三日月形の白石も出づるを世に名石とす」

木曾路名所図会 秋里籬島(文)・法橋中和(画)によるもので、享和2年(1802)~文化2年(1805)の間に、中仙道とその沿道の古事・俚伝・名所をまとめたものである。

美濃細久手の頂に

「月吉・日吉里 細久手の南、土岐郡の内、月吉里・日吉里の両村双びて里あり。此所より三日月形の白石出づる。名石なるゆゑ世に賞美す(この後、歌・句があるが略)」。

6. あとがき

以上述べてきた他に、窯業及びその原料、亜炭などが関連する事項としてある。亜炭は江戸時代に、農民が粗焼きの際に地表に露出した亜炭層に点火して燃えたのに驚き、火の神としてまつたという言い伝えがある他、本格的な産業としての発展は明治に入ってからである。窯業については、古窯史は現在、周辺地域を含めて検討が進められていて、近い将来、専門の研究成果が期待される。室町時代後半以後のそれは筆者の一人渡辺が、瑞浪市史の中で記述しているので、ここでは省略する。

いままであまりかえり見られなかった、化石と人間の長い歴史におけるかかわりあいをもめたが、資料は十分でなく、不完全なものである。今後さらに資料を蓄積し検討してゆきたい。

参考文献

- 今井功一訳註解説(1969), 雲根志(木内石亭著), 築地書館。
 糸魚川淳二(1974), 瑞浪層群の研究史, 瑞浪市化石博物館研究報告, No. 1, p. 3-7。
 瑞浪市(1971), 瑞浪市の歴史。
 ———(1972), 瑞浪市史 史料編。
 ———(1974), 瑞浪市史 歴史編。
 望月勝海(1948), 日本地学史, 平凡社。
 斎藤忠(1962), 木内石亭, 吉田弘文館。
 上野益三(1948), 日本博物学史, 星野書店。
 ———(1973), 日本博物学史, 平凡社。
 内田武志(1973), 菅江真澄全集 第9巻, 未来社。
 ———・宮本常一(1965), 菅江真澄遊覧記, 1, 東洋文庫。

Plate

Plate 54

Fig. 1. 日の宮 Hinomiya shrine

Fig. 2. 日の宮の碑 Monument of Hinomiya shrine

Fig. 3. 月の宮 Tsukinomiya shrine

Fig. 4. 月の宮の歌碑 Monument with engravings of a poem at Tsukinomiya shrine



1



2



3



4

Fig. 1. 慈照寺のお札 Divine tablet of Jishoji temple

Fig. 2. 粉本稿表紙 Cover of Funpon-ko by Masumi Sugaé

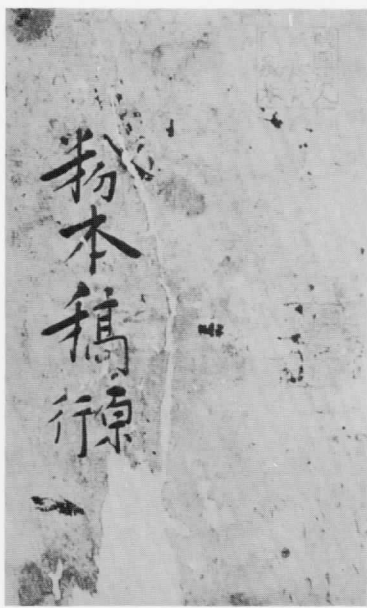
Fig. 3. 粉本稿第三丁裏 月の玉と日の玉のスケッチ Sketch on Tsuki-no-Tama (gem of moon) and Hi-no-Tama (gem of Sun) in Funpon-ko

Fig. 4. 物類品隣表紙見返し Inside of cover of Butsurui-hiushitsu

Figs. 5, 6. 物類品隣石髓の項 Clause on Chalcedony, Butsurui-hinshitsu



1



2



3

4



5

フ即時ニ凝テ石トナル其質般般ニ似テ色白シ上
説ハ香石ナリ殆ハ石ノ色ニ随テ此物モ亦色ヲ異
ニスルカ蓋器曰有白石實ト然時ハ色ハ不一ト見
エタリ
○藏器曰石髓生諸海華蓋山石窟土人未取澆濁如泥
作如彈子ト此説上ノ石中空處ニ生スルモノト
誤ナリ○越前大野郡打浪村産土午客品中郡上俣
堅石灰果宿臭之云深山澆水流出ス其遺自然ニ凝
結シテ石トナル或ハ草木ノ枝葉其外何ニテモ物
ニ汚タル時ハ其物ノ形ニ隨テ凝結ス○下野安極

下五種其本ハ一物又同ク洞中ニ生ズ種相本末ヲ
以テ名ヲ異ニスル耳
土般學 東壁曰此則鍾乳之生於山崖土中者ト按ス
ルニ乳水洞中ニ凝モノハ鍾乳ナリ土中ニ凝モ
ノハ土般學ナリ○下野産上品
石髓 按スルニ二種アリ下ニ詳ナリ
仙經曰神仙五百羊一開石髓出又玉列山見石裂
得髓食之固攝小許與醫藥化爲膏石ト是ハ石中空
處ニ生スルモノナリ○下野地野産土午客品中官
醫山田氏吳之云土人石ヲ破ル石中水アリテ流出

6

云又石中希ニ空處アレハ液其中ニ充満シ石ヲ破
レバ流出シ風日ヲ見レバ凝テ石トナル下野地野
ニ出ルトコロノ石髓是ナリ又深山幽谷石流水ト
共ニ凝タルモノアリ下野山管村越前打浪村ニ産
スル所ノ石髓是ナリ列仙傳ニ言ク疏煮石髓服即
鍾乳也ト云モノ證トスヘシ今三所出ル所ノ石髓
ヲ見ルニ其質般般乳公壁ト全ク同物ナリ又蛤蚧
蝦蟇其陰諸物ノ化石モノ乳水ノ為ニ凝結セラレ
テ行ルヲ能ハズタルスルモノアリ或ハ乳水ナク
メ化スルモノアリ又美濃國ニ産スル日ノ真月ノ書